

自閉症児の自伝的記憶に関する研究

——その随伴感情を中心にして——

中 西 和 紀

感情的な体験が引き金となって過去の同様の体験が想起され、その体験をあたかも現在の、もしくはつい最近の体験であるかのように扱う自閉症者に特異な記憶想起現象を杉山（1994）は time slip 現象と名づけた。このような記憶の混乱を示す自閉症者の記憶構造について考えてゆくために、斎藤（1994）を参考に、自閉症者に対してその自伝的記憶を聴取した。その際、自閉症群の場合、time slip 現象によって過去の不快な体験を想起することが圧倒的に多いことと、自閉症者の幼児期の外界に対する知覚が脅威的な世界であるものがみられることから、自閉症者のもつ自伝的記憶には不快なものが多いであろうこと、また time slip 現象で想起される内容には数年前のものがみられたり、また言語開始前後のものも含まれていることから斎藤でみられたような想起数の増加と言語の発達には特に関連がないであろうことが予想された。

はじめの実験では小・中学生年齢の自閉症およびアスペルガー症候群の児17名に対して、彼ら自身が過去に自ら体験した内容について憶えているものを自由に想起してもらった。その結果全体では斎藤の結果とほぼ同様に、自伝的記憶に随伴する感情の比率は快：不快：中立＝5：3：2となったが、想起した数について快の方が多かったものと不快なものが多かったものの2群に分けてみると、想起した内容について違いがみられた。そのひとつとして、快なものを多く想起した群では、想起された内容に登場する対象が両親から友人まで幅が広いのに対し、不快なものを多く想起した群ではその幅が狭かったということがみられた。また不快なものを多く想起した群における不快な出来事の内容には、友人をはじめとした家族外での不快な体験が多くみられ、彼らの社会適応の難しさが示唆された。

次に快な体験および不快な体験に対する意図的な想起のしやすさを考えてゆくために、各被験者について快な体験、不快な体験のそれぞれについて、想起までの反応時間を計測できるように実験を行った。その際、被験者全員について不快な体験に対してより早く想起されることが予想された。ここでは小・中学生年齢の自閉症およ

びアスペルガー症候群の児7名に対して快および不快な体験の想起を求めた。また統制群として同性・同精神年齢の健常児に対しても自伝的記憶の聴取を行った。その結果、快と不快な体験について想起までに要した時間に関する差は、特にみられなかった。またこの実験では自閉症群と統制群の間で想起された内容を検討した。そこでは有能感や劣等感などの自己イメージに関する体験が統制群のほぼ全員にみられたのに対し、自閉症群ではほとんどそれがみられなかった。また、統制群の想起した内容のほとんどが思い出の雛形のようなもの（例：家族旅行に行ったこと）が多くみられたのに対し、自閉症群では非常に具体的で些細な体験がいきなり報告されることがよくみられた。

これらのことから次のようなことを討論した。まず、自閉症群の大半が実験1において快な体験を報告したことから、不快な体験を忘却できるような心理的機能、もしくは抑圧に近い機制を持ち合わせているために、不快な体験が想起され難かった可能性が示唆された。次に、年齢毎に想起された体験の量と言語の発達との間に明確な相関がみられなかったことと、斎藤（1994）では小学1年生での体験の報告数をもっとも多かったのに対し、本実験ではこの傾向がほとんどみられなかったことと、自閉症群の想起した内容が些細な体験であることが多くみられたことなどから、自閉症群の記憶を構成している命題間のネットワークの構造が、統制群で想定されている構造とは異なる可能性が考えられた。

以上のことから、自閉症者の time slip 現象が、単に彼らのもつ自我境界の弱さのみから生じるのではなく、彼らのもつ独特な記憶構造によって生じている可能性も示唆された。

<文献>

- 斎藤洋典 1994 自伝的記憶と感情—記憶のホメオスタシス仮説— 日本認知科学会第11回大会抄録集 2-9.
- 杉山登志郎 1994 自閉症にみられる特異な記憶想起現象—自閉症の time slip 現象. 精神神経学雑誌, 96 (4), 281-297.